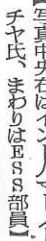


E S S

た。尚この日の会後ESS部員が集つて反省会を行つたがいづれも専門的な話になりすぎたが部員には程度が高すぎるとの結論が出た。また去る二十四日、インド人P.P.マーン・チヤを本校へ招き、インドにおける社会状態を知るといふ主旨をつて合談会を行つた氏は貿易社駐日マネジヤとして来日されており、英会話も程度の高いものではなく同じ東洋人といふ先づ親からが部員も気安く会話を楽しんだ。

なおインドの社会状態について氏の語つた旨は次のようである。


$$f_1, \dots, f_n, f_{n+1}, \dots, f_{n+m} \text{ are } \mathbb{R}\text{-linearly independent in } \mathcal{F}_n.$$

趣味は陶器の蒐集

渡邊周子先生宅

茶の旬訪問

源氏物語は今なき存在にあらうといわれる。「女性の個性の美しさ、これこそ先生の女性観の哲理であり、永遠の女性形式部」への崇拜でもあるのだらう。「人間は真実な生活求めて……」と先生は語られるが記者の想像するところ、先生の生観は案外美存主義的なかも知れない。先生の独身生活が激進が驚異するとき、それはあんな空虚なものでない。しかし先生の額の【写真は足て語られる邊に



1. 本表为初步统计，仅供参考。

金鼓

為を思い皮鞭使用許可の大英断を下される事を願うものである。

二年女子・M生

本校にはいへうと禁止すべき事項が定められてあるが、私はこの規則との規則に対する学校当局の態度には多少の疑問を持つてゐるものである。それはあまりにもこの規則が形式的、に外観だけにとられて眞の學生達の注意せねばならぬ内面的なものをおろそかにしてないか、という事である。この矛盾が時に我校にも珍現象として表れるのである。

例へば皮袍であるがこの禁止に対する学校当局の主張は「學生身分不相稱・費出品」であるそうである。私は断じてそれは学校側の独断に過ぎぬと思う。耐久性、経済的にいへば皮袍は布袍に優るとも劣らぬものである。實際に経験した者としてつゞつと痛感する二人である。この皮袍を禁止するより先ず女生徒が盛に学校へ持つて來ている赤や黄や緑の職着婦人が持つ様な手提袋こそはなにごに學生あるものの物として禁止すべきである。似て職業上は様な恰好のあの手提袋を許し皮袍ばかりやがましく禁止しているのは第三者が目れば珍現象に思ふのは當然である。先生の目をなすめて持つて來ている違反者を斥け作らるゝも無理でない実行やすい規則を作る事が肝要である。次第に多くなりゆく皮袍持参者の多い今日学校側にも二度目に生徒の

【回答】 佐野 総務

本校生徒の躰についてはよくまづ、高校生としてふさわしい態度、精神を養成する方針であることは、言うまでもないことである。この、精神の養成にふさわしく行爲に対しては、厳重に禁ずる態度を取っている。個々に考へて色々の見方もあるであらうが、全体の指導に当つては、無難のない規則である。一二の少数の生徒が違反しているならば尤も指導したい。生徒もお互に反省しあつて全校生徒が品位ある阿部野郎学生になることを切望する。

康

小寺正子

の常識（言葉使いなど）を充分身につけた生徒、身体強健者
②パランスとれた成績であること
中以上の成績。
③思想問題は個人的には云々ぬ
④家庭の父母健在影響なし。人物
本位。
⑤伊藤洋株式会社と同じ
【福井商事株式会社】
の常識を持つているもの。（言葉
使い、礼儀作法を心得ているこ
と、田舎な人間、クラブ活動を
やっている者（やはり人間を作
るうという点に於いて進んでい
る）
⑥席次は中以上、簿記、珠算の上
達した人。
⑦高等生として一応の社会論争に
なることは知っていること
⑧両親健在が望ましい。
⑨組織だった試験は余りやらぬ昨
年は基礎的な問題と面接のみ。
以上の通りであるがこれは商業高
等学校に対してのものであるから
普通科の学校とは少し条件も異つ
てくることを忘れてはならない。

一年新部員・男女問はず

太 募 集

申込は新聞部室まで

新聞部

朝から手紙の返事を書いただけで
何もする気になれない。机の前に
座つてゐるが、またすぐ立つてし
まう。野原でも歩くど気持ちいい
だろうと思ひつつ、側の康一を見
ると昨日貰つてもらつたばかりの
絵本を見ながら一人しやべり一人
で笑つている。縁側に出てみると
ずつと遠くまで稲田の続いてた
のが見える。重い襖先を低くたれ
風にゆらゆらしている様は何ともい
えない程気持ち良い。スズの短冊
にしているしてあるのは雀おどし
の一つであるが。朝日を受けて
きらきら光るのは縁の中で大へん
美しい。また、その度に響く音色
もそれ以上に爽快である。康一に
「野原へ行か」と云うと絵本か
ら目をはなれ稲田の方をみながら
「つくしがある。」と聞き返して
きた。秋と春と間違つてゐるらし
い、が間違つてもちつともおかし
いと思われない。それはほと暖か
く静かである。「康一はつくしが好
き。」と云うと「うん、かわいか
う大好き」といふ。「今は秋やか
らつくしはないけど、春になつたら
英一と一諸においでな、つくし
ん坊一杯取りにいこ」と云うと「
秋は何でつくしなの」と聞き返
してきたのは困つた。で「康一

はこことお家来つちがいい」と
話をかえると「この方がええ」と
いふ。パツヤやうきやかとま
きりが沢山いるし、花沢山あふ
からたといふ、船場真中に生れ
育つているのだから、こんなもの
は見る機会が少な。しかも
五才になつたばかりである。大抵
の子は電車や自動車の多く通る
が田舎の方がよいといふ。母に
な田舎の方がよいといふ。母に
康一は小さな詩やなぞといつ
て二人で笑つた。康一もわけもわ
からず笑つてゐる。そして、ふ
気がついたやうに安閑行き、中
かを持ててきた。こうきが静か
という程入っている。「どうし
の？」と聞くと「兄ちゃんとき
の？」と聞き返す。このおき
う畑でつくきだの。このおき
朝ごはんあつたから、きゆうり
よつた」といふ。胡瓜より草の
方がよといつても聞かない。一
お屋から、兄ちゃんも無つた。行
くから、おつ沢山作つてね」と
いうから、「おつ食べにゆくの」と
と聞く。「魚とにゆくの」と云
う。母と二人で笑つた。康も南
をあけて笑っている。また、虫か
ごをりあひ、いつたまき生むの
」といふ。（筆者は文芸部員）

